



猪突猛進の先は・・・「∞」

校 長 竹 下 賢

皆様、明けましておめでとうございます。

去年は、「命」という文字で締めくくられたように、命にまつわる嬉しいことや悲しいことがたくさん起こりました。今年も、すべての命が輝き、この世に生まれた喜びを実感するいい年になるよう祈念しています。

さて、冒頭の「∞」の記号を見て、懐かしくお感じになった保護者の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。今年最初の朝礼で、この記号の意味を生徒達に聞いたところ、一人の生徒が「無限大」と答えてくれました。「私たちの将来には、無限大の可能性がある」などと言われても、我々大人にとっては空々しく聞こえることがありますが、少なくとも子どもたちにとっては真実だと信じています。

今、3年生は、受験を間近に控えて不安な気持ちでいるかもしれません。確かに大きな試練ではありますが、これがすべてではなく、いろいろな道・可能性が無限に広がっているのだということを我々大人が肝に銘じ、子どもたちを励ましたいものです。そして、生徒達には、おおらかに、地道に、それぞれの目標に向かって邁進・猛進して欲しいと思います。

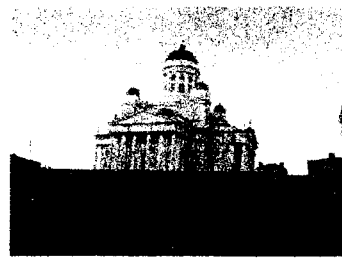
家族 最近、各方面で「家族」とか「絆」という言葉がキーワードとして取り上げられていましたが、過日、渋谷区内で起きた大変痛ましい事件は、改めて家族について考えさせられる衝撃的なものでした。家族といえども、あるいは家族であればこそ、時には、細やかな気遣いをしたり、思いやったりして丁寧な人間関係を築いていく必要があるのかも知れません。

ところで、昨年暮れの臨時国会で教育基本法が改正されました。その第十条に、家庭教育について「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。」と謳っています。鳥や動物ならば、幼い「我が子」を慈しみ、外敵から守り、飛び方・えさの捕り方を教え、最後には突き放すという子どもの自立のための当然の営みについて、我々（今日の日本の）人間は、法律で規定されなければならないのかと考えると、なんとも情けない思いがします。子どもの「心身の調和のとれた発達」や「自立」のためには、衣食住の保証ばかりでなく、親や保護者からの十分な愛情が不可欠であることを、年の初めに心に刻みたいと思います。

昨年11月5日(日)から12日(日)までの8日間、渋谷区が派遣した教育振興視察研修団の一員として、北欧のフィンランド共和国を訪問しました。

フィンランドは森と湖に覆われた美しい国で、北部ラップランドではオーロラが見られることでも知られています。日本の面積から九州を除いたほどの国土に約520万の人々が暮らしています。世界で最も生活水準の高い福祉国家の一つです。

フィンランドは、経済協力開発機構(OECD)が実施している15歳の生徒を対象とした学力到達度調査(PISA)において、2000年に続き2003年調査においても読解力・科学的リテラシー・数学的リテラシー・問題解決能力のすべての分野で好成績をあげ、参加41カ国の中で総合的な学力到達度がトップとなり「義務教育世界一」として国際的に注目を集めており、いろいろな国から教育関係者が視察に訪れています。



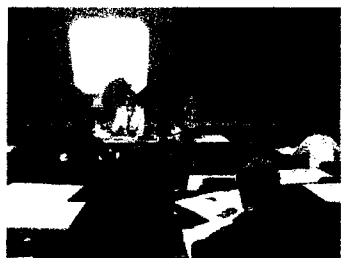
今回の視察では、首都のヘルシンキ市とその隣のエスポー市にある小学校、中高一貫校、大学図書館、市立図書館、アフタースクール(放課後、子どもを預かる児童館のような所)、日本語教室、フィンランド国家教育庁など、さまざまな教育関連施設を訪問しました。フィンランドの教育関係者は、PISAの好成績の理由を、何か特別なことをやったわけではなく、長年積み重ねてきたことの成果であると考えています。また基本的なことを繰り返し学習することが大事であると考えています。今回は、フィンランドの「義務教育」と「読書環境」を中心に報告します。

まず、フィンランドの義務教育についてですが、現在小学校と中学校の統合を進めており、「9年間の総合学校」が義務教育となっています。総合学校への入学は7歳(第1学年)で、義務教育修了時が16歳(第9学年)です。就学前の6歳児の95%がプリスクールで学び、総合学校入学に向けての準備をしています。また、第9学年終了時に学習の遅れを補ってから上級学校に進学したい場合には、第10学年生としてさらに1年間総合学校で学ぶことができます。

1クラスの子どもの人数は平均で18人程度で、1人1人の子どもに教師の目が届きやすくなっています。日本のような塾や予備校がなく、受験競争というものがありません。他人との比較ではなく、その子ども個人の能力・可能性をどう広げ高めるかを大切にしているように感じました。

義務教育修了後の進路としては、普通高校へ54%、職業学校へ38%、また3%の生徒が第10学年に進級しています。

フィンランドの国語教育で目指しているのは、「グローバル・コミュニケーション力」の育成です。これは相手が世界中の誰であろうと、自分の考えを伝え相手の言いたいことを理解できる力を育成しています。そのためには、5つの力(発想力・論理力・表現力・批判的思考力・コミュニケーション力)を育成することが必要であり、これらの力を身につけることが読解力の向上につながっていると考えられます。これら5つの力については、日本の教育の中でも部分的には行なわれていますが、系統だった指導にはなっていないのが現状であると思います。



また、フィンランドでは、落ちこぼれを出さないという方針のもと、個別のニーズに対応した教育を進めています。例えばヘルシンキ市内のある学校では、授業についていけない生徒、精神的に不安定な生徒、外国人、地方出身者、その他特別なケアの必要な生徒に対しては、それぞれの子どもの応じて学習計画が作成され、専門の教師による指導が行なわれています。

次に、読書環境についてですが、フィンランドの国民は非常によく本を読みます。1人あたりの本の読書量は、デンマークに次いで世界第2位です。各家庭において、親が子どもにも「本を読み聞かせる」伝統があります。母親だけでなく父親も子どもにも読み聞かせをしていて、現代の若い親たちも読み聞かせを行っています。クリスマスのプレゼントで一番人気があるのは、本のプレゼントだそうです。

また、図書館がその地域に溶け込んでいて、住民が生活の一部として気軽に図書館を利用しています。訪問した日の朝、開館を待つ人たちが入り口近くに集まっており、また、朝から小さな子どもたちが絵本を読んでいた。

今回の視察研修を通して、フィンランドの優れた教育制度・環境の中で、特に現在日本では失われつつある「家庭における本の読み聞かせ・読書の習慣」が非常に重要だと感じました。